

なのはな通信

第20号 2010.2



編集・発行

勤医会東葛看護専門学校

〒270-0174 千葉県流山市下花輪 409

TEL 04-7158-9955 FAX 04-7159-7055

発行責任者 石倉 啓子



稲刈り(学生活動) 撮影小林功

心が動かされ、希望が見える学校 校長 山田 功



私は東葛の学生の「学び」にいつも心が動かされていきます。どうしてかな?と思つた時、教育の雑誌に「人間はお互いに働きかけをし、相手を変えながら、同時に自分も発達するものである」という学びの本来の姿が書かれていました(『人間と教育・四九号』)。「これは東葛で毎日学生が学んでいる姿と同じではないか」という気がしました。涙と笑いと学びの本来の姿がある学校、それが私の心を動かしていると思えてきました。今年もそんな場面に何度も出会いました。初夏のある日「先生海に行ってきました。患者さんです」と声を

弾ませる学生に出会いました。在宅看護で「あと一年も生きられない」と思っている心不全の方が「海を見たい」と言つたのだそうです。故郷の海に想いを馳せる姿が見過ごせず、それを看護展開に組み入れ、所長さんやDr.「家族の協力を頂き、ついに一緒に海まで行つたのです。患者さんが変わり「あと五年は生きてみたい」と言い、学生は大感激。その「共に変化していく」学びあいの姿が輝いて見えました。晩秋のある日、ある教室に「トイレが仮設」されていました。とっても段ボールのです。「はい、次のグループ車椅子で入ってみて下さい」と言つて、実習の時に一人が体験した事を「我が事」と考え、改善点を見つけ出す試みをしていたのでした。仲間の体験を共有しあい「全員で成長しよう」とする真剣さに心が動かされました。

東葛の素敵な日々を綴ると、一科一年は合宿で団結し『ナーシングセラモニー』で感動の決意表明。一科二年はGWが素晴らしかった『生命活動』。一科三年は命の大切さに出会つた研修旅行。二科一年は東葛祭で全員が主人公になつた『前期の学びの発表』。二科二年は子どもから大人まで心を掴んだ『健康学習会』。いま一年を振り返つて、私は三上満先生の「ここに泉あり」という言葉を思い浮かべています。「人間が大切にされる社会」を願う勤医会や民医連の先輩が、医療と教育の合流点に誕生させた学校! だからこそ希望と人間味が溢れる実践が生まれ続けるのでしょう。大好きな東葛に、また暖かい春が来ることを心から願っています。

学校行事… 写真で語る

原水禁世界大会

私は去年に引き続き二回目の原水禁世界大会に参加した理由は、原爆が落とされた二つの地、広島と長崎の両方を知りたいと思ったからです。

長崎や広島は、核兵器によってなにもかもがなくなってしまう。しかし人々は落ち込んでいない間もないとばかりに、街を発展させていきました。そのような様子を自分の目で確かめてみたいと思ったからです。

実際に長崎に行ってみると現地はとても暑く、外で立っているだけでも汗が噴き出しました。

六十四年前のその日は熱線や放射線、爆風に侵され、絶望の地獄の只中だったのだろうと考えると、とても苦しくなりました。現在、私たちは何の不自由もなく、平和なことが当たり前だと思っっています。しかしほんの少し前ま

で悲惨な戦争があり、平和ではなかったという事を学び、現在がどれだけ恵まれているのかということに再認識し、そしてそれをたくさんの人に発信することが私たちに出来ることの一つだと思えます。

(平和ゼミナール
一科二年生鳥山友美)



体育祭



二〇〇九年の体育祭は「汗をかいてリフレッシュ、エクソソ腺のいたすら」をテーマにドッチボール、障害物競走、バレーボール、ムカデ競争、綱引きを行った。昨年よりも実行委員の学生の集まる回数が少ない中でも皆が協力して大成功の体育祭になった。実習で忙しい中時間を見つけバレーボールなど競技の練習をして優勝を目指すクラスもあり、大会前から盛り上がっていた。

一一一は、おそろいのクラスTシャツを作り体育祭に臨んだ。クラスの団結力が高まった。
一一二は、クラス皆で楽しみ応援もまとまってきた。
一一三は、最後の体育祭で皆で一つになって応援し楽しんでよい思い出になった。

一一一は、初めての体育祭だったが皆で盛り上がった。
一一二は、更に結束力が強まり総合優勝することができた。
今年の体育祭では競技に熱中するあまり手をすりむいてしまう人が出てし



まったので来年は安全に競技が行えるように工夫していきたい。教員も参加できる競技があったことで一緒に楽しむことができた。実習中のクラスも多く、日々の疲れもあったなかみんな汗をかいて楽しくリフレッシュできた体育祭だった。

(体育祭実行委員長
堀本悠貴、体育祭実行委員)



東葛祭

第十五回東葛祭「Yes we can! 東葛祭 く燃える心で一致団結」が十月二・三日で開かれました。今年は新型インフルエンザの流行もあり、一時は開催が危ぶまれました。また実行委員長の中では昨年の経験者が少なく皆が手探りでしたが、全員で団結しがんばりました。記念講演はフォトジャーナリストの安田菜津紀さんをお呼びし、カンボジアの子どもたちの写真を通して、貧困問題や世界の動きを語っていただきました。二十二歳の若さでこれだけの広い視野で物事を考え、行動していることに皆感動しました。三日の縦割りの動きでは学生それぞれが自分の役割を認識し、クラスを超えて協力しあえました。天気が雨にもかかわらず約三百名の参加者があり、成功裡に終わりました。



①食堂 豚汁・カレー等「美味しい」と好評でした。



②患者さんと画家の野田さんと学生のコラボレーション
—優しさをテーマに—



③手話 参加して下さいった皆さんと手話を一緒に体験しました。



④指圧・リラクゼーション 癒されたいのは皆同じ？



⑤学びの交流 2-2 実習で行った健康学習会で患者さんと一緒に勉強しました。

学生と共に 歩んだ一年

1科1年生

一科十五期生は、一人一人の良さを大事にして出来ないことを皆でカバーしながら仲間を大事にしようという思いが詰まっているクラスです。

入学後から数回に渡る「仲間を知ろうH・R」そして一科のメイン合宿では何故看護師を目指そうと思ったのか、どんな看護師になりたいのか初めてのグループワークでしたが、それぞれ語り合いました。

「看護師という仕事、自分には出来ないと思った。でもやってみなければわからない、だったらやってみよう」と思い決意した。「ヘルパーで働きながら楽しくて癒された。でもそのうちにその人の背景や病気のこともっと知りたいと思った」「患者さんの身体が急に動かなくなったり、発熱した時も何もできずに悔しかった」「入院して優しい看護師さんに出逢い、自分もそんな看護師になりたいと思った」「この職業で多くの人の関わりを通して成長したい」「仕事の幅も広い看護師という職業で精神的にも経済的にも自立したい」など目指したきっかけは一人一人違うけど、全員で思いを共有した合宿にすることができました。この二日の思いは今でも壁新聞やボードにして教室に残っています。

十五期生の看護師になりたい気持ちは日々の授業にも現れています。例えば専門分野の難しさは覚悟していますが、基礎学力としての化学や物理の知識に苦手意識をもっている学生が少なくない現実があります。しかしここは

わかる学生がわからない学生に最後まで教えあい再試験では見事全員クリア、教科担当の講師からも団結力を褒められました。

夏休みにはレク係が中心となり、クラスのほぼ全員がキャンプの企画に参加するなど十五期生の皆が「学校にくるのが楽しい」と言いながら日々過ごしていたと思います。

その後も机上の学習と共に演習や実習を経て一年次の大きな柱であるナースングセレモニーを迎えました。企画とともに自分達の決意を表明するにあたり、実行委員のメンバーとクラスの意見、教員の考えがぶつかり論戦が繰り返され波乱万丈の日々でした。一喜



一憂することもありましたが、この論議があつてこそ三十九名全員が看護師になる決意を強くすることができました。以下学生の決意文からの抜粋です。



「演習や実習を通して技術は誰のためにするのかを考える機会になりました。しかし、患者さんのために何でもしてあげたいという気持ちはまだ先走っています」「一人一人の患者さんの様々な思いに対して自分は何ができるのか考えています」「病気や障害を背負った患者さんが生を全とうすることを考える時人間はどうあるべきなのか」「患者さんありのままに捉えるということの難しさ」「患者さんに固定観念を持たずその言動の意味を考えたい」「患者さんを一人の人間として平等に接していきたい」「自分の看護に対する未熟さに落ち込みながらも看



護にやりがいと喜びを感じている」と述べています。

十五期生は臨地での実習から生きることを諦めてはいけなさと強く感じています。そしてどこかに希望の道があると信じ患者さんや地域の皆さんそして多くの仲間と探し続けたいと看護師になる決意をしています。

看護教育のカリキュラムが過密化する中、退学等やむを得ず学校から去る仲間もいます。

今十五期生は全員でナーシングセレモニーを終え、ハードルが上がる基礎Ⅲ実習に突入しました。学生の感想を紹介します。

基礎Ⅲ実習から病態が入ってくる事によって、自分が患者さんに行う看護が、より具体的に深い意味を持つものとなった。何の疾患からくる症状だと分かっていた上、浮腫が少しでも引いたり、排便が行えると自分の事のように嬉しく思い安堵した。病態でも生活史でも「知る」という事は、その患者さんに「寄り添う看護」が行えるという事だと感じた。

実習最後の日、奥さんから絵葉書を貰った。そこには「ありがとう」や「感謝」の文字と自分宛のメッセージが書かれていた。形に残るものとして貰ったのは初めてでも嬉しかった。実習中は自分の勉強不足や手際の悪さの為に多くの迷惑をかけてしまったのに、いつも快く受け入れてくれた患者さんと奥さんに、私の方が感謝をするべきにもかかわらず、「ありがとう」の言葉を沢山頂いた。そ

の時看護に対するやりがいを感じ、もっとより良い看護を行いたかったと後悔した。今度からは今回の実習で患者さんや指導者の方から学んだことを無にしない為に、又より良い看護が行えるように、日々の勉強の大切さを実感し、しっかりと取り組んでいきたい。

(一科一年 井出麻真)

今回私が受け持たせていただいたC氏は、右被殻梗塞の八十七歳の女性でした。軽度の嚥下障害や呂律不良、左上肢に力が入らない症状が見られ、難聴でした。右耳は幼いころに聞こえなくなったり左耳も年とともに聞こえづらくなってきたいました。この実習で不安に思ったことは、上手くコミュニケーションが取れるかどうかでした。「YESやNO」などは首を振ったりして意思疎通し、言葉だけでなく身振り手振りでも伝えられる事を学びました。話すことだけがコミュニケーションではないと感じました。また、口を大きく開けて口の動きだけでもC氏は理解できました。今回の実習では、病態の把握なども入ってきて大変でしたが、沢山の事を学べた実習でもありとてもよかったです。

(一科一年 渡邊瑞穂)

今はゼミに向けて学びを共有するために、自分達の目標に向けてクラス一丸となって頑張っています。

(看護第一科十五期生 担任 高田澄子)

学生と共に 歩んだ一年

1科2年生

母性実習 船橋二和病院

母性実習では、外来・新生児室・褥室で実習を行った。男性メンバーは引け目を感じたこともあったが、妊婦さん・褥婦さんはとても協力的だったので、学ぶことが出来た。妊娠期から産褥期、また新生児の生理などしっかりと把握した上での視点がないと、異常を発見できないということも勉強になった。

助産師さんは、一人一人のお母さんをしつかりと観察し的確にアドバイスしなくてはいけない。そのためには赤ちゃんの情報もお母さんの情報もみなで共有しあい、お母さんに正確な情報を伝えることで不安を取り除くことが必要であるということがわかった。だからこそ信頼関係を築けるような関わりが大切となるのだと学んだ。外来で妊娠中の経過を見て病棟へ。そして病棟で出産を終え退院後も外来でフォローをしていく。また、産婦人科では妊娠にまつわることだけではなく、女性の一生のライフサイクルを見



ていく場所なのだということが分かった。

精神科実習

みさと協立病院・初石病院

私たちははじめ・患者さんとの関わり方が分からずうまくコミュニケーションがとれないでいた。学生がいることで刺激になり興奮状態が強まってしまいう患者さんへの対応や、危険が予測される患者さんに対して学生が注意を促しているのかなどそれぞれに悩みがあり、それらを解決するためグループで話し合った。病院のスタッフの皆さんからもアドバイスをいただき遠目観察を試みることや、医療チームの一員として相談しながら関わっていくような心がけるなど、みんなで乗り越えることが出来た。

それぞれの患者さんに合った関わり方や距離感に合わせた看護をしていくことの大切さ、一人ではなくチームで看護を考えていくことが大事だと学んだ。また、精神科での看護と治療として、薬の定期服用の重要性を説明すること・患者さん自身の人との関わりを把握すること・患者さんの健康的な部分を見つけ、伸ばしていくということが重要であると学んだ。

一般の人々に植え付けられている偏見や差別などを簡単に消すのは難しい。しかし私たちはこの学びを多くの人に知ってもらえるよう伝えていき、

いろいろな人に精神疾患の患者さんや病気について知ってもらいたいと考えた。一秒でも早く患者さん達が暮らしやすい社会になってほしい、それが私たちの願いである。

小児科実習 船橋二和病院

子どもたちの成長発達や、それに対して病気が与える影響をみていきたいという思いを持ち小児実習に挑んだ。病気になることは患児にとって大きな負担である。病棟での入院生活での不安の軽減を図り、どのように患児と関わっていけばよいのかを考えた。病状が悪く、病棟にいない患児もいた。グ



ループ内で話し合い考えていき、遊びを通して関わることで、本来の姿をみることが出来た。また、病気のために十分な食事摂取できず、成長発達が遅延していたり、病気は成長発達に影響を及ぼすことがわかった。小児看護にとつて患児の精神的・身体的な発達の援助が重要である。子どもには独自の世界があり、遊びを通して沢山の刺激を受けて身体・精神的にも成長している。子どもは環境に影響されることが大きく、子どもの生活環境、人格を尊重して看護していくことが重要であると学んだ。

外科実習 東葛病院・船橋二和病院

患者の不安は術前術後と変化していくが、必ずしも入院期間中にすべてを受け入れられるようになるとは限らない。病棟では、入院中に今後の生活のフォローができなかった場合、外来に送ってフォローしていると指導者から聞くことができた。治療にあたる患者を援助していくために長いスパンでみていく必要性を感じた。退院後、今までの日常生活に戻っていくことに対して多くの患者は不安を抱いている。外来でフォローをしたり患者会を設けることで、同じ疾患を持った患者同士が話や悩みを打ち明けたりすることができている事を知った。外科看護とは手術をして終わりなのではなく退院後も外来につなげて患者のフォローをしているのだと学んだ。



田植えと稲刈りを終えて

生命活動の学びの一環として私たちは田植えと稲刈りを体験した。クラスの中には田植えを経験している人もいれば、まったく無経験の者もいた。その為、土に入るのをためらった人もいたが、時間が経つにつれて慣れていき服が汚れることも気にせず、一心不乱に田植えを行う姿が見られた。途中、雨も降ったが体調を崩す人もいなく楽しい田植えとなった。十月下旬には天候にも恵まれ稲刈りを体験することもできた。機械を使わずの手作業だったが、疲労が見られないほど良い表情で作業を行っていた。

米を育てるといふ大変さを本当に学ぶことができた。現在、日本の米の自給率は四十%を切る状況であり、学校のカリキュラムの中でこのような貴重な体験をすることができ、生命活動の学びをさらに深められたと思う。お世話になりました。

(二科十四期生 鳥山友美 担任 斉藤みゆき)



撮影 小林功

学生と共に 歩んだ一年

1科3年生

二〇〇九年四月、一科十三期生は新しい仲間を迎えて三十五人で看護学生最後の年をスタートさせました。四月、群馬県にある元ハンセン病患者収容施設「栗生楽泉園」に行きました。敷地内は広くて郵便局やお店などもありました。ここで元ハンセン病患者のS氏からお話を聞きました。S氏は中学の時に指先のしびれが始まり、段々と指を使った細かいことが出来なくなりました。医者に行くものの、たらい回しに合い「草津の温泉が効く」というのを聞いて草津に一人で行くことになりました。S氏の容姿を見た駅員から温泉街でなく栗生楽泉園の場所を教えられて生活することになったのです。

ハンセン病は非常に感染力が弱いもので、食事を普通に摂取していると発症しない病気ですが、発症すると顔や手足が変形してしまうのです。それが原因でずっと差別の対象になってきました。そして、明治時代に日本も近代化が進み、世界の文明国の仲間入りをしたという日本政府の思惑によって、諸外国から観光で訪れた人々から、ハンセン病の人たちが物乞いをしているのを全世界に知られたくなかったために隔離をされてしまうのです。この隔離には本来、治療をする側の医師が大きく関わっていることも教わりました。日本で、このような隔離の歴史があったことを初めて知るクラスメイトもいて、医療従事者になる私たちにとって貴重な学びとなりました。

三年生になり初めての實習は八週間継続して学ぶ老年・在宅實習でした。病棟と在宅の二つに別れ、老年期における病態・看護を様々な角度から学ぶことができました。訪問看護・リハ、介護老人保健施設など体験することができました。この實習で在宅で利用者さんが介護保険の限度額をいっばいに利用しても最低限の生活すら保障されていない現状を知って、日本の社会保障制度を知りたいと思ひ、社会保障ゼミで日本の社会保障の仕組みや歴史を学んでいきました。日本と世界の比較をしてみて、日本は充実した社会保障でないことが分かり、変えていく努力をしていこうと思ひました。

六月の体育祭は、十三期生初めての全員参加となりました。毎年、最下位に近い成績でしたが、今年はバレーボール



ールでの優勝もあり、総合二位となりクラスの団結力がついてきたように感じました。

夏休み明けには成人Ⅲ實習が始まりました。総合的な捉えや、患者さんの願いをつかみどのように応援していかるかを考えていくこの實習では、反省点が多く「自分たちの為の實習になっていなかったか」「初心を忘れてしまっていた」などの話が多く出ました。またインシデントについての意見をクラスみんな話し合い、それらの反省を踏まえて各自がどのような総合實習にするかを考えることが出来ました。

十月、日本国憲法、平和、医療をテーマとした研修旅行に私たちは沖縄を選びました。沖縄での学びをより深めるために、歴史や文化、戦争について事前学習・発表をして行きました。



沖縄での初日、ひめゆりの塔や平和祈念公園、野戦病院壕跡の糸敷の壕に行きました。糸敷の壕では、暗闇体験をしました。暗闇は隣の人に気付かないほどに暗く、このような状態ではまともな治療も出来なかつただろうと感じました。夕方からは、元ひめゆり



学徒隊だった宮良ルリ先生の講演を聞きました。ルリ先生たちは、まともに看護の教育を受けていないのに日本兵の手当をさせられ、目の前で学徒隊の仲間が砲弾を受けて死んでいく姿を見た話を聞きました。私たちに「戦争のことを若い人たちにバトンタッチしたい。戦争のことを語りついで言っ

て欲しい」と力強く話して下さいました。ルリ先生の体験談は涙なしにはいられませんでした。
二日目は移設のことで論議がされている普天間基地の目の前にある佐喜真美術館に行きました。ここで普天間基地からの爆音を聞きながら、館主である佐喜真さんから「基地問題は沖縄だけの問題じゃない。日本全体の問題だ。」という話を聞きました。普天間

基地は街の真ん中にあり、沖縄国際大に墜落したヘリ事故がいつ起こってもおかしくないと思いました。

その後、嘉手納基地が見える場所から見学をした。見学中、戦闘機が上空を飛んでおり、ここでも爆音を体験することが出来ました。普天間基地や嘉手納基地の周辺住民は毎日爆音を聞いていると思うと、本当に日本全体でこの問題に取り組んでいかないとけないと思えました。辺野古漁港にも行き、このきれいな海が基地のために埋め立てられ、汚染されることに矛盾を感じました。終戦から六十年以上経過しているのに沖縄では、基地問題などの沢山の問題で危険と隣り合わせの日々を送っていることが分かりました。命を大事にすることを仕事とする私たちにとって、見過ごしてはいけない事ばかりでした。この研修旅行での学びを忘れず平和な世の中について考えていきたいと思えました。

秋には千葉県の看護研究発表会に参加しました。クラスで代表事例を決め、何度も話し合っ形にしていた県下の発表では、東葛看護学生らしい発表をすることが出来ました。また、他の学校の事例を学ぶ中で、自分たちの看護観を再確認する良い機会になりました。

学生最後の総合実習・ゼミは一・二年生の前で三年間の学び、どんな看護師になるのかを発表しました。ゼミの内容も十三期生らしく感想・質問もあって最後まで活発なゼミとなり、出来るかぎり声を上げていく事の大切さも学

びました。ゼミ発表後に一人ずつ、三年間についての思いを語り合い、最後に食事会をして国家試験に向けて頑張っていこうという雰囲気になりました。
三年間、ゼミや生命活動や地域フィールドでのグループワークを通してクラスメイトの考えや看護師像を互いに知ることができ、学年を追うごとに結束してきたように感じます。これからの目標は、全員で国家試験に合格して東葛看護専門学校での学びを実践していくことです。

(一科十三期生 代表 伊波久和、今泉 宏一 担任 江島典子)



学生と共に 歩んだ一年

2科1年生

二〇〇九年四月、三十七名の学生が看講師を目指して入学しました。平均年齢は三十一歳。二十代から五十代と幅広い年齢層の学生を代表し、「人は学んで成長できる」と決意文を読み上げ、目を輝かせて入学式に臨みました。

入学して間もなく、学生同士初対面で緊張の中、「地域の人々の声から、人生・健康・医療について知り、看護について考える。」を目的に、看護総論の授業で合宿研修を行いました。各グループに分かれて六人の在宅療養をしている患者さんのお宅へ訪問し、その学びを合宿研修で深めました。あるグループが訪問した五十代前半のA氏は、手術後合併症で脊髄梗塞を患い対麻痺となり、車椅子で生活されています。お会いした時A氏は、車椅子に乗車し、温かく迎えてくれました。リフトを使用しての移乗を「滅多にない機会だから」と見せてくれました。緊張して何を話して良いか戸惑っている学生を気遣い、A氏はゆっくり話してはじめました。A氏は百貨店に勤めていましたが、障害のために一年前に退職されました。また、福祉サービスや助成金を受けるにあたり、行政は何も教えられず、利用する側が調べて進んで行動しなければ何も利用できないという事実を、自分が病気になって初めて思い知らされたそうです。この事がきっかけとなり、現在介護を受けていない人や、これから受ける人の力になりたいと話してくれました。「自分がわからなかった事を、同じような人たち



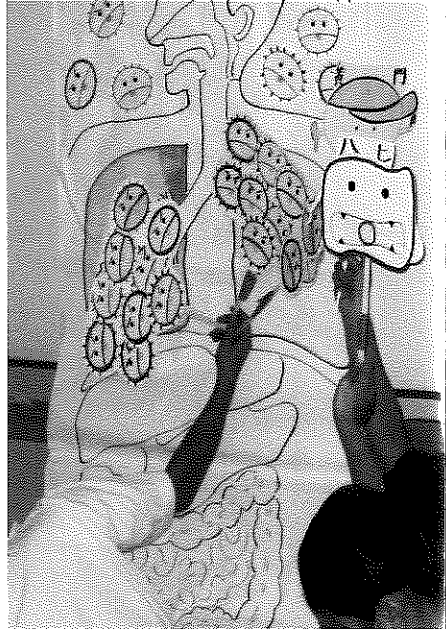
に教えてあげたい。」という目標を持ち、「まだまだ自分と闘っている」と話したA氏の目はとても力強く感じられました。「生きる力は自分で見つけるしかない」と語った言葉は、とても重みのある言葉でした。

この合宿研修で、患者さんは、決してあきらめずに前向きに病気と闘っているのだという事を学びました。六人の患者さんからの学びを共有し、みんなで協力しながら食事作りやレクリエーションを行い、力を合わせて実践したことは、主体的学びの出発点となりました。(五十嵐理奈、岡野良子)

そして、始まった基礎看護技術の授業。准看護学校時代には体験したことのない看護技術の授業展開に戸惑うこともありました。「移動運動」の授業では、車椅子体験を行いました。生物学で、「動物は動ける。植物は動けないが、進化の過程で様々な繁殖の方法を獲得した。」と教えて頂きました。

実際に車椅子で街の中に出てみると、平坦な道は少なくちよつとした段差の振動で身体に負担がかかり臀部に痛みを感じました。車椅子乗車が可能なバスに乗る時、運転手さんに介助を頼まなくてはならず、「他の乗客に迷惑をかけているのではないか」と心苦しい気持ちになりました。疾病や障害があっても、自由に移動する権利が守られる社会にしなければならぬと学びました。

基礎看護技術「生命活動」では、地



球誕生から生命誕生の歴史を通し、生命誕生・内分泌・骨筋・循環器・呼吸器・脳神経・消化器・免疫の学習に取り組みました。生物の発生・進化から私達の身体の働きの巧みさを深く学ぶことができました。

また、生命活動の一環として田植え

をしました。先生と一緒に田んぼに入り、泥が嫌だったけど、みんなで声を掛けながら苗を植えていくうちにそんなことも忘れて夢中で植えていました。手でひとつひとつ苗を植える体験で、作物を作る大変さを知ることができました。

(岡本和徳、沼尻佳奈美、福田宏子)

六月、成人看護総論で、「生活・労働フィールド」に取り組みました。自家に行き一日体験する事で、働く人々の生活労働実態と健康問題についてお聞きしました。病気を抱えながらも「誇り」を持って仕事をし、「プロとして仕事をするには、健康であることが大切」と教わりました。果樹園では、「大好きな葡萄と梨を美味しいと食べてもらうために、少しでもいい品を求めて妥協しない。」と教えて頂きました。患者さんの職業や生活背景を知る事で、疾患と結び付けその人の願いに沿った看護をする必要がある事を学びました。

(黒田郁江、村上雪絵)

そして、在宅看護論実習のあるグループは、うつ血性心不全で、何年も遠出していないB氏を受け持ちました。「来年まで生きられるかわからない。」と話したB氏が、「死ぬまでに海が見たいの。」という願いを持っていて、知りました。その願いを叶えたいと、訪問看護師や主治医に相談し、下見をして、車椅子を使用すれば何とか行け

るのではないかと考えました。B氏は、最初は不安に感じていたものの、前日にはワンピースを着て待つていた程気持ちは高まっておられました。当日は車椅子を使って移動しました。海風を感じ、海水に触れて故郷の海を思い出し、「あと五年は生きて好きなことをしなくちゃ」と見違えるように充実した表情のB氏を見ることができました。また、この外出が成功したら娘が外食に連れて行ってくれるということでも、家族にも変化があらわれました。

(小林亮博、吉川幸興)

基礎実習は、患者さんの事実をありのままに捉え医療要求を知る、看護技術は患者さんの生命活動に結び付いている事を学ぶことができました。ある学生は、八十歳代の糖尿病のC氏を受け持たせて頂きました。C氏は元教員であるという先入観から、パンフレットも文章中心で難しいものを作ってしまったのですが、C氏の「俺、糖尿病なの？」という発言から、絵を入れ、C氏に合わせて作るようになって、「病気について何も知らないから教えて」と変化され、一緒に糖尿病について学ぶことができました。また、家族にも協力を得て、患者さん、家族、医療スタッフで病気と向き合っていく必要性を学びました。

(尾崎寛幸)

十五期生は、担任も新任でフレッシュ？な気持ちでスタートを切りました。教員自身が学生とともに学び、育

っていくことを実感しながら充実した学校生活を送っています。このクラスは、仲間同士で助け合い育ちあう雰囲気があり、お母さん学生が病気で休んだ若い学生の食生活を心配して差し入れる優しさもあります。

二年生になると、実習が続き忙しい毎日になります。在宅看護論実習・基礎実習のように、各論実習でも患者さんから多くを学び、人間観・健康観・看護観を発展させていきたいと思えます。

(二科十五期生一同 担任 菊池静華)



学生と共に 歩んだ一年

2科2年生



意図的に作
っていたと
いう事実を
改めて知る
ことが出来
た。この事
実を変える
事は出来な
い。しかし

〈栗生楽泉園と重監房〉
四月に行った栗生楽泉園は、群馬県草津温泉街のすぐ近くにあり、入所者の鈴木幸次さんからお話を伺う事が出来た。事前にハンセン病の学習をして行ったが、私達が考えているよりもっと辛い差別を受けていたことを知った。隔離・強制収容された患者さんたちは、家族とも縁を切らなければならず、人里離れた厳しい土地に連れて行かれた事を知った。療養とは名ばかりで、色んな薬を投与され、その副作用で後遺症が悪化してしまつた事実や、園の職員に逆らえば、人権を無視して「重監房」という刑務所のような所に入れられてしまう事を話してくれた。「重監房」とは、暗い壁に囲まれた所で、冬は排泄したものが寒さで凍りつくような過酷な部屋である。そして、おにぎり一個ほどの粗末な食事は一日二回で低栄養となり、排泄物も出ない状況であったとの事だった。その話を聞き、同じ人間が人間を差別することがあつていいのだろうかと感じた。ハンセン病に対する誤った考えから偏見が生まれ、海外で治療が確立されてからも、事実を政府が隠し続けた。偏見は、国が

国がおかした過ちを今後二度と繰り返してはならないとハンセン病患者さんたちは、現在も闘っている。私達は、医療者として正しい知識を身につけ、この事実を広めていく事が大切だと感じる。また、ハンセン病患者さんがよりよく生活していけるよう保障制度を充実させていくべきだと思う。



〈三泊四日の九州研修旅行〉

原爆の被害に遭われた谷口ロズミテルさんに当時のお話を聞いた。谷口さんは、長崎で郵便配達中に被爆し、その背中を貫いた放射線と熱線は、遺伝子レベルまで焼き尽くし、真っ赤に染まつていた。その姿は原爆資料館にも写真が展示されている。谷口さんは、背中からの皮膚呼吸が出来ないため、経験を語っていた。谷口さんが体験してきたその辛さ、怒り、悲しみを感じながら、「原爆は作つてはいけない」と訴えている姿から、その時の苦悩が私達の心にも伝わり、共感できた。平和の大切さ、そして何よりも平和を守るためには、いつの時代でも皆が平等で、人権を尊重しあつていく大切さを学んだ。また、水俣で起きた公害問題や米軍基地がある佐世保での、住宅街のす



ぐ近くに弾薬庫を置くなどと地域独特の問題を抱えている事実を知り、人権問題について深く考えられるようになった。そして、私達一人一人もこの事実を世に訴えて二度とこのようなことが繰り返されないようにしていくべきだと強く感じた。

〈各論実習・老年実習・総合実習の学び〉

消化器疾患の多かった外科病棟での実習では、消化管の役割をはじめ、手術で切除した後には、残った器官で機能を補う代償する力があるという事を学び、術後早期に離床した「早く帰りたい」と願う患者さんの頑張りを健康ことが出来た。実習最終日に行う健康

学習会では、手術に臨む、または無事手術を終えた患者さんを応援するため、術後合併症予防の為に術前訓練の必要性や術後の早期離床の必要性をとりあげた。患者さんは、様々な不安を抱えながら手術を受けることを決意している。そんな患者さんの願いに添った術前訓練の紹介は、術後痛みと闘いながらも術前訓練どおりに呼吸法を行う患者さんの頑張りへとつながり、「やっぱり腹式呼吸の方が楽だね」という患者さんの言葉から、学生自身も改めて健康学習会の意味と必要性について学ぶ事が出来た。

母性実習では、分娩見学で生命誕生の感動、そしてお産を無事終えた褥婦さんに密着する中で、母の強さや頑張りを学んだ。初産婦さんの受け持ちはした時、上手に授乳する事ができないと不安を口にされていたことから、正しい授乳の姿勢やおっぱいマッサージの手順などをとりあげ健康学習会を行い、共に学ぶ事が出来た。

精神科実習では、集団作業療法を実践している病棟から患者さんの健康を拡大する応援・看護の役割を学んだ。早期に社会へ送り出していくことを目的とした病院の理念から、患者さんの人権を考えていく必要性を学んだ。また、担当した患者さんの願いに合わせた企画をし、入院中の患

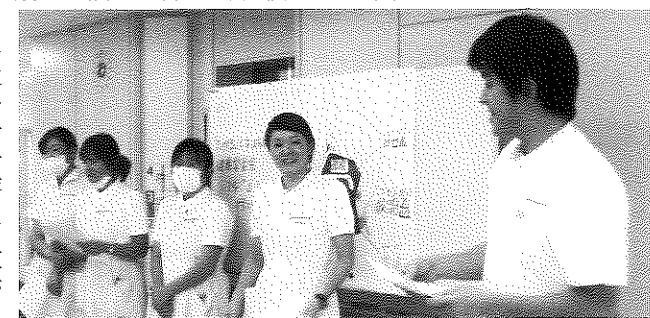
者さん達の参加を募って、一緒にクッキーやた焼き作りを行った。運動不足を心配する患者さんたちへは、風船バレーやペットボトルボーリングを行い、患者さんと一緒に楽しんだ。

小児科実習では、知的障害があり、てんかんによつて入院していた六歳の児は、それまではつききりと言葉を発することがなかった。しかし、健康学習会の紙芝居に夢中になり、「バイキンマン」という言葉がきかれた。毎日繰り返す日常生活のあらゆる場面から成長・発達を保障する応援の重要性を学ぶ機会となった。健康学習会がきっかけとなり言葉を発する場にいられた私達は、家族と共に喜びを分かち合うことが出来た。どんなに重度な障害があつても、必要な応援があれば発達していけるのだという学びをクラス全体で共有する事が出来た。千葉県看護学生研究発表会では、小児実習で受け持った熱性けいれんの二歳五ヶ月男児の事例を発表した。事前にクラス全員で事例についての話し合いを何度も設け、発表本番に備えた。発表当日には全員で参加し、他の事例からも研究を

視点として考えていく看護展開があることなど多くの学びを得た。老年実習では、学生一人が、透析病



棟で急性腎不全で透析導入となつたF氏を受け持たせていただいた。長期の入院により認知症が急激に進行、薬物療法により日中傾眠傾向であった。



日々の実践では、清潔ケアや車椅子移乗して散歩に行き、生活リズムの確立を促していた。実習後、F氏にお会いするとナーステーションでリクライニング車椅子に座っており、透明の箱を持っていった。F氏が箱を落としたので拾って渡すと「ありがとう」と返事が返ってきた。このように学生の「手」があれば、患者さんは回復していくことを学んだ。しかし、実習終了後、忙しい病棟の中で、密着していたような看護が実践する事は現在の医療体制では困難であるという問題点も見えてきた。この背景にある社会保障について総合学習で学ぶことにした。

二年間の積み重ねの最後の実習である、総合実習では、日本の社会保障制度をグループで学びあった。憲法第二十五条で保障される、「健康で文化的な最低限の生活」が土台となり、社

会保障及び公衆衛生の向上、及び増進に努めなければならない。いつでもどこでも誰もがかけられる医療を、一番求めているのは、私たちの目の前にいる患者や家族である。誰もが平等な医療や介護を受けられる権利を主張し、私たち医療従事者が声を上げていかなければならないと深く感じた。これまでの社会保障の歴史、現在の保障を学び、今の社会保障になるまでには朝日茂さんの命をかけた「人間裁判」が大きく関与していたことを学んだ。社会保障を必要としている高齢者にとつて満足いく状況ではなく、そこには国の「無駄遣い」「改悪」などがあり、「マンパワー不足」という問題意識を共有し学ぶことができた。

ハンセン病・研修旅行・実習など忙しい学校生活であつたがたくさんの貴重な学びを得ることが出来、それら全てが、私達個々の看護観の発展へとつながっていく。私達に学習する機会を与えてくれた患者さんとそのご家族、指導者さんを始め病院スタッフ、先生方の協力があつたからこそ出来た。それらに感謝すると共に、二年間の学びを忘れずに今後医療に携わるものとして日々成長していきたいと思う。

二科十四期生クラス長 染井満寿生

ようこそ先輩



一科四期生 市川 亜由美

私は立川相互病院の総合内科に勤めています。急性期病院で忙しい日々ですが、若手看護研修が充実しており、みんなスクスク成長しています。

私の病棟には先輩が二人います。

一科八期生真田さんはしっかり者で頼りがいのある存在です。ついつい、いつも甘えて頼ってしまいます。

一科十一期生西城さんは、まだまだ若手で悩んだりまよったりの日々ですが、病棟のみんなに、一緒に調べ、学ぶチャンスがくれる大切な人です。こんな素敵なのが病院によかったら遊びに来てください。皆さんも学生生活がんばってください。

四月で十年目ですが、同期のみんなに今でも支えられています。忙しいけれどますます充実しています。

高橋麻衣子

清水宣行

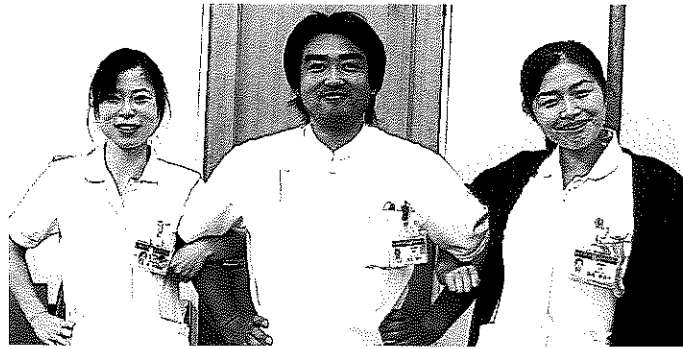
10年にして成らず。

10年たっても

看護の道は

看護師になって早9年 忙しい毎日ですが 頑張ってます。

1科4期生 石塚咲緒里



教員より一言

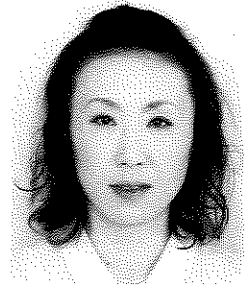
一科四期生担任 井上裕紀子

看護学校を卒業して丸十年ですね。

各々の職場で中堅看護師として臨床指導や若手指導チームリーダー・育成とチームの中心的存在に成長し頑張っています。

たのもし限りです。

二科四期生 橋本 麻由



私は、現在東葛病院四階東病棟に勤務し主任業務を行っています。四階東病棟は、一般内科、整形外科・泌尿器外科の混合病棟です。昨年四月からこの病棟に異動しました。以前は六階西病棟の身障加算を取っている慢性期病棟でしたので、急性期病棟の回転の速さについていくのが大変でした。慣れないスピードと経験のないことの多さに落ち込み逃げ出したくなる事も多くありました。しかし、頼りになるリーダー層やメンバーに支えられました、患者さんの頑張る姿に勇気ももらい乗り越えています。

六階病棟では、家に帰りたいと懸命にリハビリを頑張る患者さんの願いを応援したいとチームで一丸となり、患者さんの生活実態をとらえ実践してきました。また、四階東病棟では、骨折で寝たきりとなり廃用が進みさすれば重篤な病態になってしまう患者さんが多くいます。チームでは、廃用を予防し患者さんの願いに答える看護を目指し頑張っています。そして、今は、

やりがいと楽しさを実感しています。

しかし、「帰りたい」という願いがかなわず在宅退院できない患者さんも多くいます。私はまだまだ経験や技術不足で課題があります。常に患者さんの訴えや要求を大事に患者さんから学

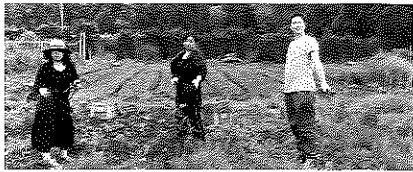
教員より一言

二科四期生担任 松原郁子

早いもので、卒業して十年たちます。医療制度が変わり、患者さんにとっても、働く医療従事者にとってもきびしい実態となっています。その中で、患者の願いに答える医療を行いたいと卒業生が中心となり踏ん張っています。私たちは、日々そんな卒業生に励まされています。

橋本主任は、学生時代から、患者さんの訴えや話を丁寧に聴き患者さんに信頼を得ていました。今は、「患者の要求を実現する医療」を目指し、主任として、リーダーシップをとり頑張っています。いつも、「自分は、まだまだです」といい、謙虚に患者に学び向き合っている姿が輝いています。

キラリ 学ぶ青春



生活労働フィールド



基礎看護技術：導尿



100回入学式



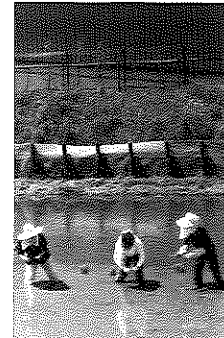
栗生楽園 見学研修



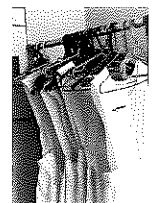
合宿レポート発表



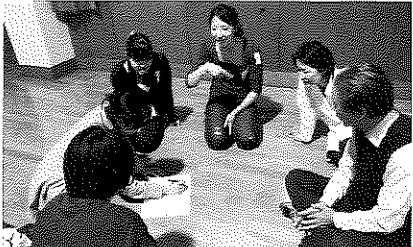
田植え



車イス ウォッチング



'09.4~11
小林功
モノクロ写真館



新入生合宿



基礎実習：健康学習会



車イス ウォッチング



稲刈り



合宿研修 患者訪問



基礎実習：健康学習会



稲刈り



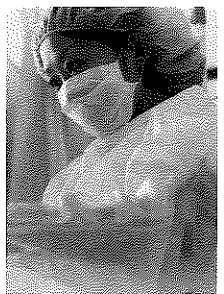
体育祭 最強の教員軍団



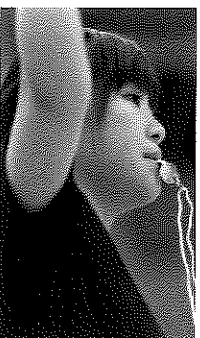
ナーシングセレモニー



手洗い



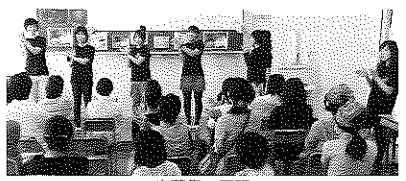
ガウンテクニック



体育祭



東葛祭 後夜祭



東葛祭 手話



東葛祭 食堂